

# 室町時代における『莊子虞齋口義』

王 廸

初めて『莊子虞齋口義』を講述したのは惟肖得巖であるとした林羅山の「老子口義跋」以来、これが通説となっている。しかし、『莊子虞齋口義』は既に南北朝期に刊行されているので、惟肖得巖が講述する前に既に日本に知られていたと言える。このことは既に拙稿「室町時代の老莊——惟肖得巖を中心に——」において論じているので、ここではその重複を避ける。<sup>①</sup> 本論文の目的は南北朝刊『莊子虞齋口義』を詳査するのみならず、室町期の『莊子虞齋口義』の研究状況を明らかにすることにある。

## 一、従来の林希逸「虞齋」に対する理解

舍人林竹溪先生希逸

林希逸、字肅翁、號竹溪、福清人。端平進士。淳祐中、遷秘書正字、景定中、官司農少卿、終中書舍人。有虞齋集、易義、春秋傳、考工記解。<sup>②</sup>

「艾軒學案」には、上述のように『莊子虞齋口義』の作者林希逸の略歴を述べているが、『莊子虞齋口義』については言及していない。林經徳の序によれば、『莊子虞齋口義』の成書年代は寶祐六年（一二五八）である。<sup>③</sup> しか

し、刊行年代はやや後の宋理宗景定年間（一二六一〜一二六四）と推定される。<sup>4</sup>「莊子鷹齋口義發題」に林希逸の学は艾軒（林光朝）より出ずると、希逸自ら明記している。<sup>5</sup>日本では、室町中期頃には、林希逸の存在が禅僧の間に知られていた。<sup>6</sup>しかし、当時の林希逸に対する理解の詳細は、『莊子口義棧航』から伺える。

希逸號鷹齋、本朝近代講者曰、鷹鼎也、老莊列猶三足鼎、又比之儒釋道。非希逸之意。林德經後序、鷹其書室也、子號弓齋、父子以器名齋。<sup>7</sup>（希逸號は鷹齋、本朝近代の講者曰く、鷹とは鼎なり、老莊列は猶ほ三足の鼎の如く、また之を儒・釋・道に比すと。希逸の意に非ず。林德經の後序に、鷹とは其の書室なり、子の號は弓齋なり、父子器を以て齋を名づく。）

「林德經」は「林德經」の誤りであるが、確かに「林德經後序」に「鷹齋其書室也」とある。「鷹鼎也、老莊列猶三足鼎、又比之儒釋道」という説は誤りであるところでは指摘されている。しかし、鷹が鼎であり、これを老莊列の三足の鼎に喩えていることは、元来五山禅僧惣一華の説であることが次の一文によって理解できる。

惣一華ノ説ニ莊老列ノ三部ヲ希逸力注スルカ、コレヲ三足ノ鼎ニ喩ト可見欤<sup>8</sup>  
レハ狭リソ、此心ヲ押廣メテ見ハ儒釋道ノ三教ヲ三足ノ鼎ニ喩ト可見欤<sup>8</sup>

以上、二つの記事によれば、室町中期から近世初期にかけて、「鷹」は鼎と認識され、これが老莊列の三足の鼎に喩えられ、儒・釋・道の三教に比せられるのが一般的傾向であった。

## 二、五山版『莊子鷹齋口義』

周知の如く、室町時代は五山版が盛んになった時代である。五山版の刊行は康永二年（一三四三）から始まるとされているが、<sup>9</sup>明証がある最古の五山版は弘安十年（一二八七）古倫が鎌倉建長寺の正統庵で出版した『禪門寶訓』

二卷である。従って、五山版の嚆矢は一二八七年に溯ることができ、五山版の最盛期は南北朝時代で、出版は内典から外典に及び、内外数百種に達したと言う<sup>11)</sup>。川瀬一馬は『五山版の研究』に「五山並びに禅宗関係者によって、鎌倉・室町期に刊行された書籍」を五山版と定義している。又、『国史大辞典』では「鎌倉・室町時代に、京都・鎌倉の五山をはじめ、禅僧に属する寺院または仏僧によって出版された、宋刊本・元刊本・明刊本の覆刻本、及び宋元版の版式を持つ版本」と定義している<sup>12)</sup>。従って、日本最初の『莊子虞齋口義』刊本は鎌倉・室町時代の禅寺或いは仏僧によって出版された五山版書物で、刊行時期は五山版の最盛期で、一三九二年以前だと考えられる。現在存在が確認されている五山版『莊子虞齋口義』の所蔵を表一に纏めておこう。

表一 五山版『莊子虞齋口義』

簽題名	現 存 卷 数	目録上の刊行時期	所 蔵	略 称
1 莊子口義	十卷十冊	南北朝刊(卷一〇元刊)	内閣文庫	内閣本
2 莊子虞齋口義	九卷	五山版	陽明文庫	陽明本
3 莊子虞齋口義	八卷	室町初刊	足利学校遺蹟図書館	足利本
4 莊子虞齋口義	八卷	南北朝刊	建仁寺両足院	両足本
5 莊子虞齋口義	六卷	南北朝刊	成實堂文庫	成實本
6 莊子虞齋口義	五卷	足利初期刊・五山版	天理図書館	天理本

ここに掲載している五山版『莊子虞齋口義』は、各図書館及び文庫の目録によって刊行時期は異なっているが、調査した結果の表二によれば、全て同版であることが分かった。しかし、残念なことに、全十巻本が揃っているのは内閣文庫の『莊子虞齋口義』のみである。だが、表一に示しているように、目録類には巻十は元刊本で補っている<sup>13)</sup>としている。内閣本の巻十は、虫食や破損のため所々文字が欠けており、かなり修補が施されているが、

他の各本と全く同版であるから卷十も南北朝刊本に違いないと思われる。又、川瀬によると、「三井家旧蔵初印。島田翰旧蔵」に十冊（十卷）本があるが、筆者は未だ見ていない。上掲の刊本は闕本を除き、後述の如く僅かな点で川瀬の所査と異なる所があるものの、全体的には川瀬の言う通り、「左右雙邊、有界八行十六字。匡郭内、縦六寸一分五厘、横四寸五厘」である。

いま、五山版の体裁及びその異同の調査結果を表二に示しておこう。

表二 五山版『莊子虞齋口義』の体裁

冊数	卷数	卷名及び内容	葉数	所蔵	異同及び特徴
第一冊	卷一	莊子虞齋口義發題	三葉	内閣文庫	①「發題」は「發題」に同じ。 ②内閣本は「發題」と「穆陵宸翰」の間に十巻目と同一である「莊子後序」が三葉巻き込まれている。
		穆陵宸翰	一葉	建仁寺両足院	
		莊子虞齋口義目錄	一葉		
		莊子虞齋口義卷之一（卷末題あり）			
		内 莊子内篇逍遥遊第一	二十二葉		
		篇 莊子内篇齊物論第二	五十七葉		
第二冊	卷二	莊子虞齋口義卷之二（卷末題あり）		内閣文庫	①陽明本のは室町末の補写らしい。 ②「人間世」（二葉〜二十九葉・四〇〜四十三葉。）内容から見れば、四〇〜四十三葉は三〇〜三十三葉の丁数の誤りだと思われる。
		内 莊子内篇養生主第三	十四葉	陽明文庫	
		莊子内篇人間世第四	三十三葉	建仁寺両足院	
		篇 莊子内篇徳充符第五	二十四葉		
		莊子虞齋口義卷之三（卷末題あり）		内閣文庫	
第三冊	卷三	内 莊子内篇大宗師第六	四〇葉	陽明文庫	①「駢拇」十五葉裏に「三月廿日三丁」の戯刻あり。 ②「馬蹄」八葉裏7行目の終りに陰刻楯印「馬
		篇 莊子内篇應帝王第七	二〇葉	足利学校	

第四冊	卷四	外 莊子外篇駢拇第八 篇 莊子外篇馬蹄第九	十五葉 八葉	建仁寺両足院 天理図書館	蹄篇」があるが、篇末題はない
第五冊	卷五	莊子虞齋口義卷之四(卷末題あり)	十四葉	内閣文庫	①成篁本は卷四まで江戸初期の補写。 ②卷頭に前三巻とやや異なる体裁で「胠篋篇 在宥篇 天地篇」と「篇」が付いている。
		外 莊子外篇胠篋第十一 莊子外篇在宥第十一 篇 莊子外篇天地第十二	三十四葉 四十一葉	陽明文庫 足利学校 建仁寺両足院 天理図書館	
第六冊	卷六	莊子虞齋口義卷之五(卷末題あり)	二十五葉	内閣文庫	①卷頭の「義」は「義」に同じ。 ②「繕性」に篇末題なし。
		外 莊子外篇天道第十三 莊子外篇天運第十四 篇 莊子外篇刻意第十五 莊子外篇繕性第十六	二十八葉 八葉 一〇葉	陽明文庫 足利学校 成篁堂文庫 天理図書館	
第七冊	卷七	莊子虞齋口義卷之六(卷末題あり)	二十七葉	内閣文庫	①「達生」は「達生」に同じ。 ②「山木」の篇末題に「子外篇山木第二十」となっ ている。天理本では「子」の上に「莊」を補写。 ③成篁本の「秋水」は一葉欠。「山木」は錯簡で、 一〜四葉が卷末にある。五〜八葉、十一・十五、 二〇〜二十三葉欠。
		外 莊子外篇秋水第十七 莊子外篇至樂第十八 莊子外篇達生第十九 篇 莊子外篇山木第二十	十四葉 二十三葉 二十三葉	陽明文庫 足利学校 建仁寺両足院 成篁堂文庫 天理図書館	
第七冊	卷七	莊子虞齋口義卷之七(卷末題なし)	二十二葉	内閣文庫	内閣本は「田子方」の十五葉から卷末まで朱点・ 朱引・墨訓なし、「知北遊」の二十三葉欠。
		外 莊子外篇田子方第二十一 篇 莊子外篇知北遊第二十二	三十四葉	陽明文庫 足利学校	

第八冊		卷八		雜 莊子雜篇庚桑楚第二十三 篇 三十五葉 建仁寺両足院 成篁堂文庫内		
莊子虞齋口義卷之八(卷末題あり) 莊子雜篇徐無鬼第二十四 三十八葉 陽明文庫		雜 莊子雜篇則陽第二十五 三十三葉 足利学校		篇 莊子雜篇外物第二十六 二十一葉 建仁寺両足院 成篁堂文庫 天理図書館		①「徐無鬼」は三十八葉に「八卷卅八」の戯刻がある。 ②「外物」篇末に各本それぞれ筆跡の「其意則忘言矣不能忘言則泥著而失(其意)」一行の補写がある。
第九冊		卷九		莊子虞齋口義卷之九(卷末題あり) 十三葉 内閣文庫		①「寓言」・「説劍」の篇末に「篇終」字様があるが、篇末題無し。
雜 莊子雜篇讓王第二十八 二〇葉 足利学校		莊子雜篇盜跖第二十九 二十三葉 建仁寺両足院		篇 莊子雜篇説劍第三十 五葉 成篁堂文庫		②「盜跖」二十三葉表に九卷目を示す「九」の戯刻がある。
第十冊		卷十		莊子虞齋口義卷之十(卷末題あり) 十二葉 内閣文庫		①「列御寇」の二十三葉表に「廿四」、裏に「十卷(云々)」の戯刻がある。
雜 莊子雜篇漁父第三十一 十二葉 陽明文庫		莊子雜篇列御寇第三十二 二十三葉 足利学校		篇 莊子雜篇天下第三十三 三十九葉 成篁堂文庫		②成篁本は「跋」と「後序」の順序は逆、「莊子後序」最終葉欠。
後 莊子後序(林經徳序) 三葉		序 景定辛酉・石塘林同謹書 二葉		跋 景定辛酉十一月徐霖景説跋 二葉		

以上の調査は、『五山版の研究』にある『莊子虞齋口義』の書誌をより詳細に検証したものである。その結果、川瀬の述べる「卷八の末に「三月廿日（云々）」等の戲刻の附刻等が見られる」は、「卷三」の誤り、「林徑徳後序」は「林經徳後序」の誤りである。又、陽明本で欠けているのは卷一のみである。この南北朝刊『莊子虞齋口義』は各所蔵図書館や文庫によつて、それぞれ異なる蔵書印が見られる。内閣本には、内閣文庫の蔵書大角朱印及び「彰考館」の朱印があるが、但し「彰考館」朱印は卷一のみである。足利本は足利学校の蔵書印及び各卷末に鼎形朱印と「雪」署名がある。両足本は各卷頭に「両足院」蔵書印が見られる。天理本は天理図書館蔵書印と「寶玲文庫」朱印がある。中でも、成篁本の蔵書印が他より多く見られ、卷五・卷七・卷八・卷九の卷末に「聖杉」陰刻朱印がある以外は、殆ど卷頭に見られる。特に卷七（卷八も同じ）の卷頭に蔵書印が最も多い。それは徳富蘇峯蔵書朱印・島田重禮や島田翰読書記の朱印以外に、室町時代の「伯松」角朱印や「敬甫」篆刻印を含めれば五印が捺されている（末尾の書影A参照）。これらの蔵書印は過去この南北朝刊『莊子虞齋口義』に係わつて来た研究者や蔵書家のことを物語っている。

この五山版『莊子虞齋口義』は、表二の「卷三」「卷九」の「異同及び特徴」欄及び「卷七」の「卷名及び内容」欄に示した箇所以外、各卷首と篇首のみならず、各卷末と篇末にも、それぞれ卷題と篇題がある。又、第一冊目の卷頭を見れば、明かに日本最古の静嘉堂所蔵の南宋劉辰翁点校本と異なる系統であることが分かる（末尾の書影B-1・B-2参照）。莊子口義の版本（例えば、南宋刊本・元刊本や江戸時代の風月庄左衛門板など）について、各卷に卷末題があるのは通常であるが、各篇に篇末題はあまり見られない。清家文庫の清原國賢及び稻常などの手筆である室町末期『莊子虞齋口義』抄本及び長澤規矩也編『和刻本諸子大成』所収寛永六年風月宗知刊本『莊子虞齋口義』は、行数・字数を除き、この南北朝刊本の体裁に近いと言える。<sup>15</sup> なお一つ興味深い所は、卷三「馬蹄」の

篇末に篇末題はなく、「馬蹄篇」の三文字しか見られないこと、及びその篇末題のない箇所がほぼ一致していることから見れば、上述した清家抄本及び和刻本は、この五山版『莊子鷹齋口義』の系統に拠ったと考えられる。

### 三、『莊子鷹齋口義』の研究状況

南北朝刊『莊子鷹齋口義』がこれほど現存しているのを見ると、言うまでもなく、口義注がかなり早い時期に知られていたと言える。各本に見られる室町期の朱引・朱点・墨訓及び余白の書込みなどは、当時随分研究されていたことの有力な物証である。実際、室町期にはこの刊本以外にも、他の莊子関係注釈本がある。これらの注釈本はどのように研究されていたかを見てみよう。

まず、足利学校は文安三年（一四四六）既に老莊学を授業として認めた<sup>16</sup>。いま、『莊子鷹齋口義』の外に、足利学校遺蹟図書館所蔵の室町期の莊子関係書物を下記に述べておこう。

- 1 南華真經注疏解經十卷 唐釋玄英 古写本十六冊 室町中期写本
- 2 南華真經注疏解經三十三卷 唐釋玄英 古写本十三冊 室町中期写本
- 3 莊子抄 三十三篇六冊 室町末期写本

足利学校の蔵書の源流について、長澤規矩也は十五類に分けている。上掲1・2の『南華真經注疏解經』二部は、第三類の「歴代庠主の手写遺愛の書で、現存の古書中にも少なくなく、中には確証がないものもあるはずである」としている。『莊子抄』については言及していない。但し、蔵書の内容から七種に分類し、『莊子抄』を第七種の室町末期から江戸初期のものとしている<sup>17</sup>。これに対して、川瀬一馬は『足利学校の研究』において『南華真經注疏解經』十卷十六冊本及び『南華真經注疏解經』三十三卷十三冊本について、その存欠の篇数・補配本な



どの書誌的記載は長澤規矩也の「足利學校貴重特別書目解題」に記しているのとほぼ同じであるが、<sup>19</sup>『南華真經注疏解經』十卷十六冊本を、宋版によって移写したものと述べ、本書は九華より稍以前の書写にかかるものであると推測している。『莊子抄』について、川瀬は第六世庠主文伯及び第七世庠主九華時代の書物であるとし、写本六冊の第二・三・六の三冊のみ原表紙を存し、九華の手題があるとした上で、文伯の遺筆ではあるまいかと推定している。<sup>20</sup>だが、文伯の遺筆であるか否かは文伯の他の筆跡と対照しない限り、判断する決め手がないと思う。

実際、両『南華真經注疏解經』とも帙題は同じであるが、十卷十六冊本の書題は『莊子註疏』であり、三十三卷十三冊本は『莊子郭象註』である。前者は逸失と補配以外は、全体の篇数の順序は合っているのに対して、後者は前後錯簡して頗る乱雑し、卷三の二葉目に仏教「三十行位」及び「四十回向」の図表さえ混入している。両『南華真經注疏解經』及び『莊子抄』の書写年代はにわかに確定できないものの、川瀬の推測している『莊子抄』が第六世庠主文伯の遺筆であるとするのは、以下の理由から疑わしい。文伯の生卒年は不詳であるが、九華が第七世庠主になったのは天文十九年のことであるので、<sup>21</sup>文伯は天文年間（一五三二～一五五五）に生存していたと推定される。この頃は、南北朝刊『莊子虞齋口義』の刊行から百五十年後のことであり、惟肖得巖など五山禅僧の莊子口義講述より百年ぐらい後のことであつた。又、室町中期、林希逸の名は、景徐周麟の「希逸字偈序」に「劉宋に謝希逸あり、……趙宋に林希逸あり」とあるほど、禅林に知られていた。従つて、天文年間の文伯が林希逸のことを知らなかつたはずがない。だが、『莊子抄』の「南華真經序」に「口義ハ林希逸作ソ、何タル者トハ不見ソ」とあり、「莊子口義義齋發題」（「莊子虞齋口義發題」の誤り）に「虞齋ハ希逸力齋名ソ、……口義トハ口カラ義里ヲ述ノ心ソ、……林希逸ハ元朝カ宋朝カノ者ナラ未詳ソ」とある。もと建仁寺の僧で博学で足利學校第六世の庠主になつた文伯が、室町中期から盛んになってきた口義本の作者林希逸のことを知らなかつたということとは

考えられない。このことから、たとえ文伯の遺筆（抄写）であったとしても、内容から見れば、『莊子抄』が室町初期或いは初期以前の講義録であると判断できるのである。いずれにせよ、この『莊子抄』と前述の両『南華真經註疏解經』は、ともに「口義」に言及している。特に、十卷十六冊本『南華真經註疏解經（莊子註疏）』の写本部分と『莊子抄』の表紙の見返しに、『莊子』田子方から引いた莊子の略伝の後に、『莊子虞齋口義』の卷一にある篇題「逍遙遊」と全く同じ百六十字前後の解釈文が見える。そのみならず、『南華真經註疏解經』の方は頭注及び行間などに同筆の口義注の書入れが目立っている。『莊子抄』の場合は全六冊の二冊目「莊子内篇徳充符第五」を境として、「徳充符」より以前は口義注があまり見えないが、「徳充符」の後半から六冊目の末尾まで、同筆の口義による頭注が葉数に連れて出現頻度の増加が見られる。

その他、大東急記念文庫には、書題簽「化蝶翁」の元刊本『莊子虞齋口義』が所蔵されている。この全十巻口義本は江戸初期の補写である卷一・卷三を除き、全て朱引・朱点・墨訓が施され、その研究の跡が伺える。又、卷二・卷四・卷五の巻末に「借大昌和尚本点之頭書亦然」、卷六の巻末に「借大昌天隠和尚本点之頭書亦然永正丁卯五月十三日了之病後」、卷七の巻末に「借大昌和尚本点之頭書亦然永正丁卯夏五下」と記されている。すなわち、この大東急文庫本にある頭注や余白の書入れは、天隠和尚本によつて施したものである。従つて、この大東急文庫本以外にも、遅くとも明応二年（後述の天隠の記述による）以前、五山僧天隠大昌（一四二二〜一五〇〇）の口義本があることが分かる。天隠大昌の口義本は今見られないが、天隠大昌の研究ぶりはこれらの書入れから伺える。いま、その具体的研究姿勢を卷六「外篇達生第十九」の一葉裏にある書込みを例として取り上げる。

…一口幾張匙、何人語哉、出何典記、余到处尋其語、未有答者。明應二年癸丑暮春、偶過万年宜升景徐西堂、架上有教誠儀一冊、加句点、余借之遊目。食時法第八云、凡一口之飯、須匙頭、三抄食。令匙頭直入口。此句出其語…天隱頭書（一口幾張匙は、何人の語なるや、何の典記に出づるか、余到る処に其の語を尋ぬるも、未だ答ふる者有らず。明應二年癸丑暮春、偶々万年宜升景徐西堂を過ぎるに、架上に教誠儀一冊の句点を加ふる有り。余之を借りて遊目す。食時法の第八に云ふ、凡そ一口の飯、匙頭を須ひ、三抄に食す。匙頭をして直ちに口に入らしむと。此の句は其の語に出づ…）

明応二年（一四九三）に、口義注の「一口幾張匙」一語について、やっとその出典が見つかったという調査状況とその結果がこの書込みによつて分かる。同書には、他にも「彭曉參同契」、「永嘉真覺禪師」や「證道歌」などのような禅語や禅經典に関する書入れが見られる。このように禅語や禅經典に関する書入れは、両足院所蔵などの禅僧と関わりのある南北朝刊『莊子麴齋口義』にもしばしば見えるが、これに対して、内閣文庫所蔵本は、「禮記檀弓」・「晉書樂廣傳」などの經史による注や、「司馬云」「簡文云」などの音義の書入れが多い。天隱和尚本の頭書を引用した大東急文庫本に見られる禅語・禅經典の書入れ以外、所々郭象注や玄英疏が見える。実際、南北朝刊本『莊子麴齋口義』にも郭象注と玄英疏の引用が所々見えるが、これらを足利学校遺蹟図書館所蔵の『南華真經註疏解經』と『莊子抄』に引用されている口義注と比較すると、口義注の引用が圧倒的に多い。従つて、当時の莊子研究姿勢は口義注が主で、注疏が従であつた言うことができよう。

又、室町末期の写本と判定される成篁堂文庫所蔵の『莊子麴齋口義發題卷一』<sup>(22)</sup>は、清原宣賢（一四七五～一五五〇）の講述である『莊子抄』と全く同文である。但し、『莊子麴齋口義發題卷一』は全五冊十卷『莊子抄』の「卷之一」（即ち「莊子麴齋口義發題」）と、「莊子麴齋口義卷之一」（即ち「逍遙遊」と「齊物論」）の部分を抄写したも

のである。『莊子虞齋口義發題卷一』は全六十三葉あるが、巻首に「莊子虞齋口義發題」があり、九葉目に巻題「莊子虞齋口義卷之一」があり、篇題「逍遙遊第一」がある。「齊物論」は二十五葉から六十三葉までである。同書の表題簽は「莊子發題 雲如和上手録」で、内題簽は「莊子第一抄 雲如禾上筆」である。巻首と巻末に徳富蘇峰の蔵書印が見られる。表表紙の見返しに「昭和六稔六月初八投重値、修装面目維新 蘇峰六十九叟 誌喜」と蘇峰の手題によってその修補が施されたことが分かるが、両題簽に示している「雲如」に関する手掛かりは見当たらない。但し、蘇峰（一八六三〜一九五七）の生まれた年に江戸の詩人遠山雲如（一八一〇〜一八六三）が亡くなっている。『寰内奇詠』『蟹紅魚白集』『玉池吟社詩』を著した遠山雲如は、嘗て長野豊山・梁川星巖らに学び、幕府に仕えて倉吏となったが、後に職を辞して南総に隠棲した。彼は京都の人で、小倉大輔の第三子で、母の姓を名のり、名は澹・裕齋、又は雲如山人と号した<sup>24</sup>。恐らく前述の『莊子虞齋口義發題卷一』に見える雲如は、この遠山雲如と同一人物ではないかと考えられる。いずれにせよ、『莊子虞齋口義發題卷一』は清家の『莊子抄』の一部分によって抄写した書物であり、清家の『莊子抄』と同じく『莊子虞齋口義』が片仮名交じりの和文解説書であることは確かである。

以上、両『南華真經注疏解經』に見られる口義注の書入れ、足利学校遺蹟図書館所蔵の『莊子抄』は「莊子内篇徳充符第五」の後半から頭書に口義注の導入、そして、大東急文庫本『莊子虞齋口義』にある禅語の出典をつぶさに調べる天隱和尚の姿勢、清家の和文解説である『莊子虞齋口義』などによって、室町時代における口義注の研究姿勢は歴然としている。

## 結語

今回の調査により、各図書館や文庫所蔵の南北朝刊『莊子虞齋口義』は、それぞれ欠本や錯簡・乱丁などはあるが、いずれも同版であることが判明した。清家の抄本『莊子虞齋口義』も『和刻本諸子大成』所収の寛永六年風月宗知刊『莊子虞齋口義』も、いずれもこの系統に拠ったものと認められる。南北朝刊『莊子虞齋口義』の各本に見られる朱引・朱点・墨訓や書入れは、この刊本が広く研究されていたことの明証である。室町時代における莊子口義の研究は、この南北朝刊『莊子虞齋口義』のみならず、当時の写本『南華真經注疏解經』などの注疏本にも夥しい口義注が書込まれていることから、その盛況が伺える。両足院所蔵の南北朝刊『莊子虞齋口義』にも、大東急文庫『莊子虞齋口義』にある天隱和尚の書入れ同様、禪經典に関する書入れが多く見られる。これに対して、内閣本にはそれらの書入れが見られないが、「禮記檀弓」・「晉書樂廣傳」などのような経史からの引注が見られるということは、当時それらの書物を読んだ研究者のそれぞれの関心が異なっていたからであろう。又、足利学校遺蹟図書館所蔵の莊子講義録『莊子抄』は「莊子内篇徳充符第五」の後半から口義注の引用が葉数に連れて増して行くことが見えるが、このことは莊子講義を講述した当初、口義注はさほど重視されなかつたのに、やがて口義注が重要視され、日に連れて口義注の引用が増えて行ったことを物語っていると考えられる。つまり、口義注重視の時間的な経過が感じ取れるのである。

#### 注

- (1) 王 廸「室町時代の老莊——惟肖得巖を中心に——」中華民国八十六年度留日学人学術論文專輯 一九九八年三月
- (2) 黄宗義著『宋元學案』二 王雲五編 台湾商務印書館 中華民國五十七年三月台一版 一二三頁
- (3) 『莊子虞齋口義』(下) 和刻本諸子大成第十二輯 汲古書院 昭和五十一年七月 林經徳後序に「戊午訪竹溪於溪上、因

語而及、溪忽謂我曰、余嘗欲為南華老仙洗去郭向之鄙、而逐食轉移、未有閉戸著書之日、憂患廢退以來、遂以此紆而娛老、今書幸成」とある。「戊午」年即ち南宋理宗寶祐六年のことである。

(4) 前掲(3)。跋文に「景定辛酉十一月己巳、三衢徐霖景說跋」とある。

(5) 前掲(3)。「莊子虞齋口義發題」に「希逸少嘗有聞於樂軒、因樂軒而聞於艾軒之說」と述べている。

(6) 芳賀幸四郎「中世禅林における莊子研究——五山の學問と近世の學問との關係——」

日本歴史四十四号 日本歴史学会編集 昭和二十七年 九十三頁

事実、室町中期頃、林希逸の存在が禅僧間に知られていたことは、景徐周麟がその徒のために「希逸字偈序」をつくり、そこで「劉宋に謝希逸あり、……趙宋に林希逸あり」といつていることで察せられる。

(7) 人見卜幽軒『莊子口義棧航』延寶九辛酉歲八 山本景正梓 「莊子口義棧航序」

(8) 続抄物集成第七卷『莊子抄』大塚光信編 清文堂 昭和五十六年二月 「莊子卷之一」國賢抄。

(9) 『朝日百科日本の歴史』別巻一 朝日新聞社 一九八九年四月 四一九九頁。

(10) 長澤規矩也『書誌学序説』吉川弘文館 昭和三十五年六月初版 一六一頁。

(11) 前掲(11)。

(12) 川瀬一馬『五山版の研究』日本古書籍商協会 昭和四十五年三月。

(13) 『改訂内閣文庫漢籍分類目録』内閣文庫 昭和四十六年三月 三二八頁

(14) 前掲(12)。「五山版の研究」上巻 四七七頁。

(15) 清家文庫『莊子虞齋口義』京都大学附属図書館所蔵貴重書 大府卿清原國賢・細川典厩被官元建仁寺僧稻常らの手筆。

長澤規矩也編『莊子虞齋口義』上・下 和刻本諸子大成第十一輯・十二輯 昭和五十一年六月・七月。

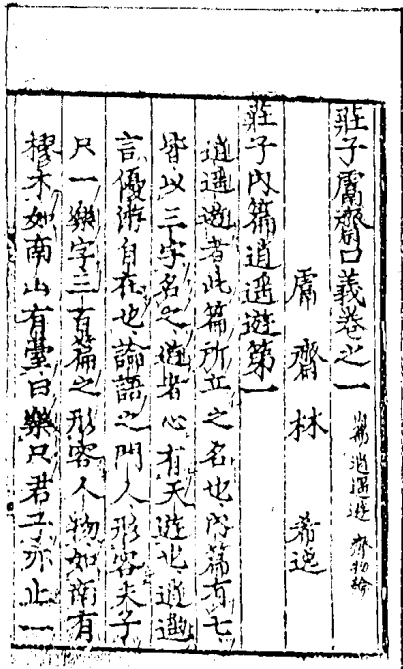
(16) 足利学校は、文安三年六月晦日に定められた「校規三条」の第一条に老莊学が授業の一つとして認められていたことが見られる。

川上廣樹著・長澤規矩也解題『正續足利學校事蹟考』『續足利學校事蹟考』足利学校遺蹟図書館後援会 昭和五十一年

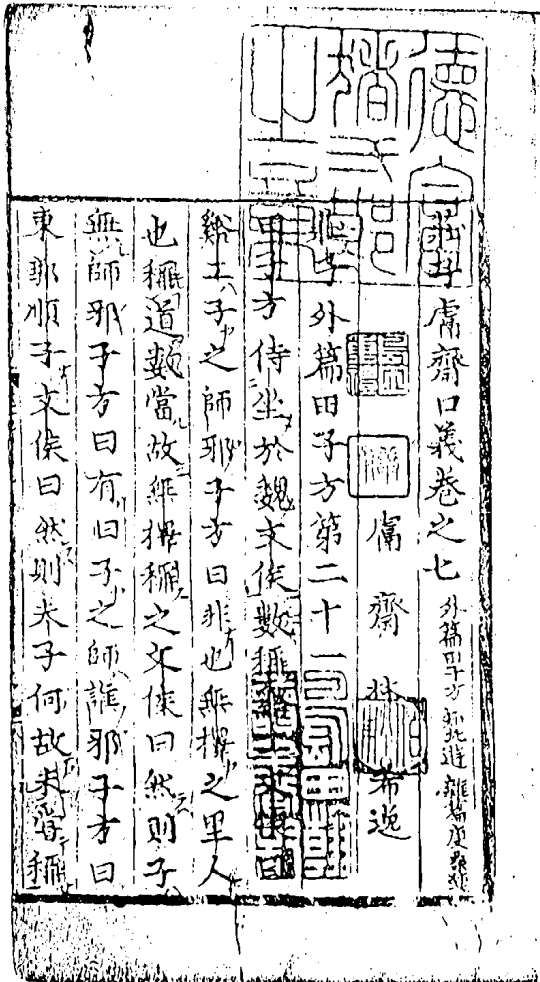
十一月 八十四頁。

- (17) 長澤規矩也編『訂補足利学校遺蹟図書館古書分類目録』汲古書院 昭和四十一年三月初版 昭和五十年二月訂補版第一刷 昭和六十三年十一月訂補版第三刷。
- 『訂補足利学校遺蹟図書館古書分類目録』長澤規矩也「後記」一〜三頁。
- (18) 川瀬一馬『足利学校の研究』(株)大日本雄辯會講談社 昭和二十三年三月 二一〇頁。
- (19) 『長澤規矩也著作集』第四卷 汲古書院 昭和五十八年十二月 三二四〜三二六頁。
- (20) 前掲(18)。二〇七頁。一二九〜一三〇頁。
- (21) 前掲(18)。一一五頁。
- (22) 川瀬一馬『新修成篁堂文庫善本書目』(財)石川文化事業お茶の水図書館 平成四年十月
- (23) 前掲(8)。
- (24) 『日本人名大事典』平凡社 一九三七年十二月初版・一九七七年七月覆刻版第一刷

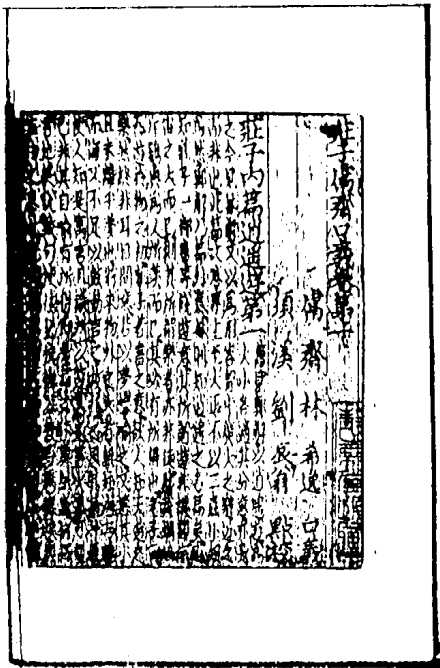
附記：本論文は文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。



書影 B-1 内閣文庫所藏南北朝刊『莊子厲齋口義』卷之一



書影 A 成篋堂文庫所藏南北朝刊『莊子厲齋口義』卷之七



書影 B-2 静嘉堂文庫所藏南宋刊『莊子厲齋口義』卷第一